実践報告

自治体による子育て支援事業における専門家としての役割
－つどいの広場事業での相談会－

渡邊　香　Kaori Watanabe*　・　戸津　有美子　Yumiko Totsu*

＊国立看護大学校　National College of Nursing, Japan.

東京都清瀬市では「つどいの広場」を５箇所開設し、育児相談の場にもなっている。的確な対応のため、受託団体の保育士と報告者とが協力した。

５カ所のうち２カ所で１回/月、相談会を行った。内容が他者と共有できるものは参加者全員で共有し、それ以外は個別に対応した。ほとんどの相談が共有され、最多は子どもの発育・発達、次いで、急性疾患、外傷や事故、アレルギー等に関する相談だった。母親に関する相談もあった。参加者同士、「私も同じ。」と共感し、他者の相談からも自分の悩み事解決のヒントを得ていた。どこで誰に相談すればいいかわからない悩みを共有することで、連帯感を増し、安心感を得る効果もあった。また、保育士と助産師が協働することで、より具体性のある対応ができ、効果的なものになった。

複数職種協働は効果が高く、推進が望まれる。今後は自治体の子育て支援事業の拡充、特に助産師の指導スキルの活用や事業への起用が必要である。

キーワード ： 集いの広場、ソーシャルネットワーク、子育て支援、育児相談、多職種連携

Ⅰ．背景

我が国では少子化や核家族化が進行しており[1)]、現代の日本の母親たちは家庭内で十分な支援を受けられない環境下で子育てを行っている。支援の少ない中での子育ては、孤独感や不安を感じやすいが、そのような環境では、社会との関りであるソーシャルネットワークが乳幼児を持つ母親の孤独感や不安を軽減させる[2)]といわれている。子育て中の母親のソーシャルネットワーク構築、地域の子育て支援機能の充実のために、平成 14 年（2002 年）の「つどいの広場事業実施要綱」策定以降、全国各地で主に公共施設を利用した「つどいの広場」が開設された[3)]。

東京都清瀬市でも市内の５ヶ所で、市の子育て支援事業による常設の「清瀬市〇〇つどいの広場」）（〇〇は地区名）（以下、つどいの広場）を週６日開設し、運営の大部分は市内の子育て支援団体への委託事業となっている。つどいの広場は、乳幼児と両親、祖父母等が一緒に遊べる無料の場所として解放され、主に市内と近隣の母子らに利用されている。

つどいの広場は、母子の仲間づくり等に貢献しているが、相談員に気軽に相談できる場所にもなっている。10 年間以上の運営の中で、保育、医療等の専門家を含まないスタッフにより日常運営がなされ、臨時で専門家の相談員をおいていた。専門家相談員は、これまでに医師、薬剤師、保育士、看護師等であったが、母子の相談への対応は具体的かつタイムリーである

ことが求められ、その内容も、子どもの発達・健康や事故防止、子育て環境や情報、産後の母親の心身の相談等、多岐にわたり、すべてのことに一人で対応できる相談員の確保が困難な状況が続いていた。

そのため、受託団体の保育士と母子支援の専門家である助産師で看護大学教員（以下、報告者）とが協力して相談事業に対応した。

Ⅱ．実践内容と方法

清瀬市による常設施設 5 カ所のつどいの広場のうち、二カ所の運営を受託する子育て支援団体の特定非営利法人子育てネットワーク・ピッコロ（以下、ピッコロ）が子育て中の施設利用者に対して参加を呼びかけ、1 回/月、専門家による子育て相談会を行った。29 年度後期（29 年 10 月～30 年 3 月）に行った 6 回の実践について集計を行った。

つどいの広場はいずれも 20 帖程度の広さの一室で開催されている。子どもを遊ばせながら参加者が自由に相談できるように、つどいの広場開催日に合わせて子育て相談会を開催し、運営スタッフが母子を見守る中、ピッコロの保育士と報告者が相談に応じた。相談会開催時間帯につどいの広場に訪れたほとんどの参加者と保育士、報告者が車座になり、参加者が自由に発言した。相談内容に応じ、保育士と報告者が分担してアドバイスを行った。相談内容が他者と共有できるものは参加者全員で共有し、共有できないものはその後に個別相談とした。相談会は 60 分／回程度であり、一相談あたりの所要時間は 5～10 分程度であった。相談件数は 8～12 件／回程度であった。

共有可否の判断は、すべて相談者の自由意思によって決定し、相談内容は個人が特定されないように集計、公表されることを説明し同意を得た。

Ⅲ．結果

参加者のほとんどが 1 人または 2 人の乳幼児を連れた母親だった（表 1）。自由な雰囲気で相談会を行った結果、ほとんどの相談が全員で共有する内容だった。最も多い相談は子どもの発育・発達に関すること（表 2）であり、その詳細は「離乳食をあまり食べない」、「卒乳がなかなか進まない」といった離乳（食事）や卒乳に関すること、「検診で小さめと言われた」、「身長と体重のバランスが標準から逸脱している」といった身長・体重の変化に関すること、「まだ長いことばを話せない」といった言葉の発達に関すること、「歩くようになった時期が遅い（または早い）」といった運動発達に関すること、「昼寝をして夜寝ない」、「2 歳近いが毎日夜中に起きる」といった睡眠や生活リズムに関すること、「他の子どもに関心がない」、「他の子を叩いたり噛んだりする」といった遊びや他児との関わりに関すること等、多岐にわたった。次いで、感染症等の急性疾患に関すること、食物アレルギーやアトピー性皮膚炎といったアレルギー等に関すること、転倒等による外傷、誤嚥や誤飲といった日常起こりうる事故に関する相談だった。

また、産後の体形変化や下着の選び方、尿漏れや膣の緩みと対策（体操法やパットの選び方）、授乳期の食事や服薬、授乳期の乳房の自己管理（マッサージ、衛生法、下着やパッドの選び方）、育児期の腰痛や腱鞘炎症状等の母親の身体に関する相談、夫婦関係の変化、父母や義父母との関わり、ママ友との関係等の周囲の人間関係に関する相談もあり、これまでに相談相手がなく困っていたとの声が多かった（表 3）。

相談内容のなかで受診が必要と思われるものは受診を促し、それ以外のものにそれぞれ対応した。また、参加者同士で「私はこうしている。」、「私は△△（商品名）を使っている。」等とアドバイスし合う場面がある等、話題に広がりがみられた。参加者同士は、「私も同じ。」と共感することが多く、他者の相談からも自分の悩み事解決のヒントを得ていた。

表 1.　相談者の背景　n=58（のべ人数）

	項目	人数（%）
子どもとの続柄	母	56（96.6）
	祖母	2（3.4）
子どもの年齢	1 歳未満	24（51.4）
	1～2 歳	18（31.0）
	2～3 歳	9（15.5）
	3～4 歳	5（8.6）
	4～5 歳	3（5.1）

表 2. 子どもに関する相談内容の概要

相談内容	内容の詳細	のべ人数
離乳・卒乳・幼児食	離乳食をあまり食べない 卒乳がなかなか進まない	32
身長・体重の変化	検診で小さめと言われた 身長と体重のバランスが標準から逸脱している	21
言語発達	まだ長いことばを話せない 健診で発達の遅れを指摘されたが家ではよく話す	12
運動発達	歩くようになった時期が遅い（または早い） ハイハイなしで歩き始めたが問題ないか	12
睡眠や生活のリズム	昼寝をして夜寝ない 2 歳近いが毎日夜中に起きる	9
遊び・他児との関わり	他の子どもに関心がない 他の子を叩いたり噛んだりする おもちゃの譲り合いや順番待ちができない	8
急性疾患	風邪をひきやすい 集団保育に入れたいが、病気をうつされるのが心配	8
アレルギー	アレルギーはいつから判定できるのか 親がアレルギー体質だと子どもに遺伝するか 妊娠中の食事制限で子どもの発症を抑えられるか 食物アレルギーの子はアトピーも発症するのか 離乳食にはアレルギーを起こしやすい食物を使わないほうがいいか アレルギーを防ぐ方法はあるのか	7
外傷	よく転んでけがをする 小傷が治りにくい 肘の脱臼を起こしやすい	6
誤嚥・誤飲	タバコを吸う家族がいるので誤飲が心配 上の子の細かいおもちゃを口に入れるので心配	4

表 3. 母親に関する相談の概要

相談内容	内容の詳細	のべ人数
産後の体形変化	体形が戻らなくて悩んでいる 妊娠線が目立って気になっている	15
尿漏れ・膣の緩み	くしゃみ、咳で尿漏れがして困っている 産後長期間経つが、入浴時に膣にお湯が入る 産後、タンポンで経血が漏れるようになった 産後、夫に「緩くなった」と言われた	13
授乳期の食事・服薬	授乳中は絶対に飲酒してはいけないのか 脂っこいものを食べると母乳が詰まるのは本当か 何を食べると母乳がよく出るのか 子どもの顔の湿疹は母乳の成分のせいだと言われた	10
授乳期の乳房の自己管理	張りを感じなくなったが、出ていないのか マッサージは必ず必要か しこりができて気になるが様子見でいいのか。 母乳パッドが蒸れてかゆい ブラジャーはいつからしていいか	8
育児期の腰痛や上肢痛	産後、ずっと腰が痛い 産後、恥骨部が痛い 授乳姿勢が続いて、手が痛い 肩こりがひどい	8
夫婦関係の変化	夫が子育てに参加してくれない 夫婦生活がなくなった	3
父母、義父母との関係	義母が頻繁に連絡してきて、困る 母が子育てに干渉してくる	2
ママ友との関係	子連れで他人のペースに合わせるのがきつい	1

Ⅳ．考察

本活動における参加者のほとんどは母親だった。育児を行っている母親は医学的な専門性の高いことから一般的なことまで、多岐にわたる悩みを抱え、1 人に長時間の相談時間を割くことのできない乳幼児健診や産後の健診だけでは解決できずにいた。母親の孤独感を予防・軽減するためには、母親が育児を通じた人間関係を構築することやサポートを受けながら育児を行っていくための力を高める支援とともに、地域の人的ネットワークを含む地域の環境づくりへの支援が重要である[2)]、母親同士の会話とあわせ、妊娠から育児まで一連の課題に対応できる専門家に質問できることが母親の日常の育児の不安解消の場とできる[4)]といわれるように、どこで誰に相談すればいいかわからない悩みを、ゆっくりとどのような内容でも相談できる雰囲気で専門家が対応し、参加者同士で共有することで、連帯感を増すだけでなく、自分だけの悩みではないという安心感を得る効果もあったと考えられた。

専門職による子育て支援実践は、元来独自な各専門職の視点と理念が支援の場を共有することで複合的な支援となる[5)]といわれているように、保育士と助産師が協働することで、具体性のあるアドバイスができ、相談者にとって

よりイメージしやすい効果的なものになったと考えられた。また、大学教員（助産師）をはじめとする専門職が育児相談に応じる体制は養護者の満足につながる[6]といわれるように、看護大学および看護教育者・研究者の地域資源としての活用も重要な子育て支援策の一つとなり得ることが示された。

短時間のなかでも、他の母親とのかかわりや専門家とのかかわりから、母親らは自ら身近なソーシャルネットワークを構築していたと考えられた。それぞれの母親が、必要な時にそれを活用できるよう、常設のつどいの広場の継続的利用を促すことはもちろん、自治体機関や施設をはじめとした子育て支援機関への助産師の配属等が有用な対策であるといえる。

本報告では、父親の参加や相談はなかったが、母親が育児サポートとして重視するサポート源は「夫（パートナー）」と「自分の母親」に関して月齢による有意差がなかった[7]と報告されているように、子育て支援において、子どもの父親や祖父母への支援も重要な課題であるといえる。

Ⅴ．結論

つどいの広場での子育て相談会参加を通じ、悩みを共有することで母親同士の共感や連帯感が生まれ、悩みが自分だけのものではないという安心感につながっていた。また、複数職種協働での子育て支援は効果が高く、今後も推進していくことが望まれる。

また、上記により母親らは自ら身近なソーシャルネットワークを構築していた。今後も支援を継続していく必要がある。

Ⅵ．今後の課題

今後は、自治体における子育て支援事業の拡充、特に多職種協働や助産師の指導スキル、母子支援スキルの活用や自治体事業への起用が必要である。また、子どもの父親や祖父母への支援も強化していく必要がある。

謝辞：本報告にご協力いただきました皆様に感謝いたします。

利益相反：本報告において、報告すべき利益相反状態にある企業、団体はない。

受付　2019 年 3 月 24 日
受理　2019 日 5 月 9 日

文献

1）　平成 30 年版少子化社会対策白書, 内閣府, 2018.
2）　佐藤美樹，田高 悦子，有本 梓：都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因．日本公衆衛生雑誌, 第 61 巻 3 号:p121-129, 2014.
3）　つどいの広場事業実施要綱, 厚生労働省, 2002.
4）　高橋　順子，小川　佳代，近藤　彩他：大学を拠点とする子育て支援イベントに参加した母親の反応．四国大学紀要，A46 巻，p1-8，2016.
5）　津間　文子：地域子育て支援拠点事業『子育てひろば』に通う母子の実態と支援の実際　ー子育て支援にかかわる専門職 4 名のインタビューからー．看護・保健科学研究誌，第 18 巻第 1 号，p97-106，2018.
6）　大林　陽子，岡田　由香，緒方　京他：大学を拠点とした子育て支援事業の活動報告と評価．愛知県立大学看護学部紀要, 第 17 巻, p33-39, 2011.
7）　小原　敏郎，入江　礼子，南　貴子他：育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討Ⅱ　ー子どもの発達的変化、育児サポートとサポート源の関係構造に焦点をあててー．日本家政学会誌，第 59 巻第 7 号，p471-484，2008.

Role of Professionals at the Event of Local Government Aid Project for the Child-rearing.; Consultation Meeting at the Open Space of Gathering.

The Kiyose-city of Tokyo metropolitan has set up five locations of “Open Space of Gathering”, providing spaces for child-rearing consultation. The nursery staff and of the authors as midwives fiduciary organizations collaborated for accurate responses.

At two of five locations consultation meeting has been held once per month. The content of consultations was shared by all participants if it was sharable by others, and the rest of them was individually responded. Almost all consultations were shared and the most of them were about children’s growth and development followed by consultations regarding acute medical conditions, injuries and accidents, allergies, etc. Also, there were the ones about mothers themselves. Each participant acquired a hint to solve own worry from other’s consultation, empathizing as “me too” among them. Through sharing a worry about not knowing where and with who to consult, a feeling of togetherness was enhanced and it had an effect on nurturing a feeling of security as well. In addition, collaborating among the nursery staff and midwives made possible to respond more specifically and to be effective.

Promoting collaboration among multiple professionals is desired as it is highly effective. It will be necessary to improve child-rearing support project by municipality, particularly utilizing teaching skill of midwives and employing the service of midwives to the project.

Keywords; open space of gathering, social network, child-rearing support, child-rearing consultation, multiple professional collaboration